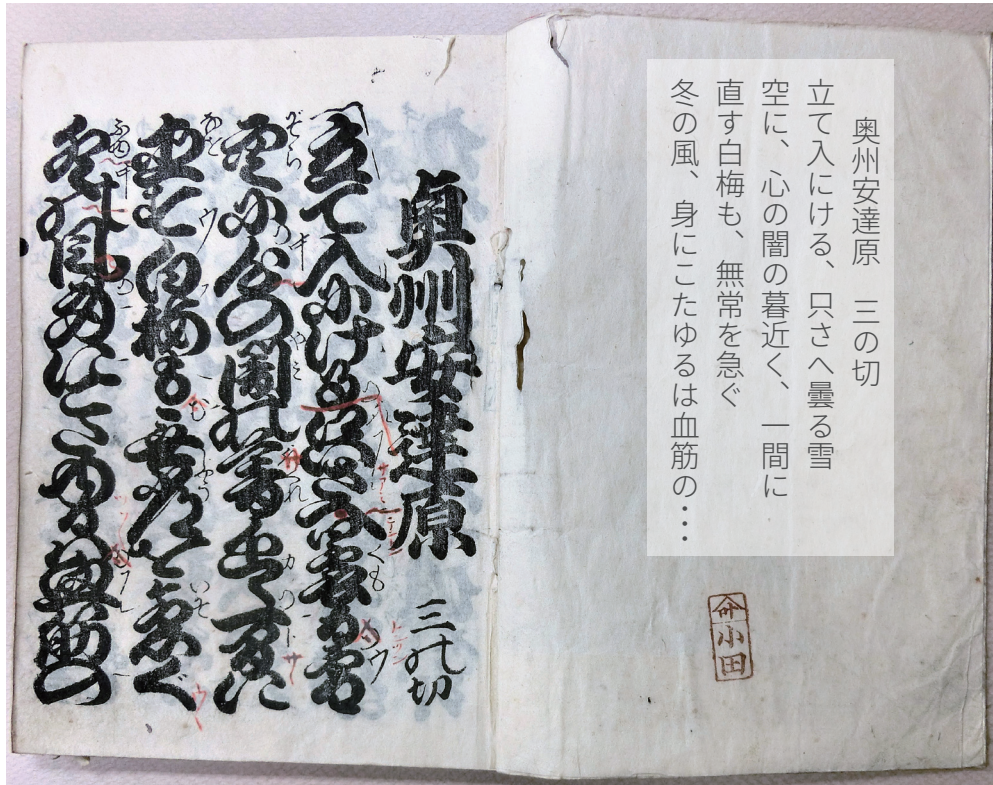
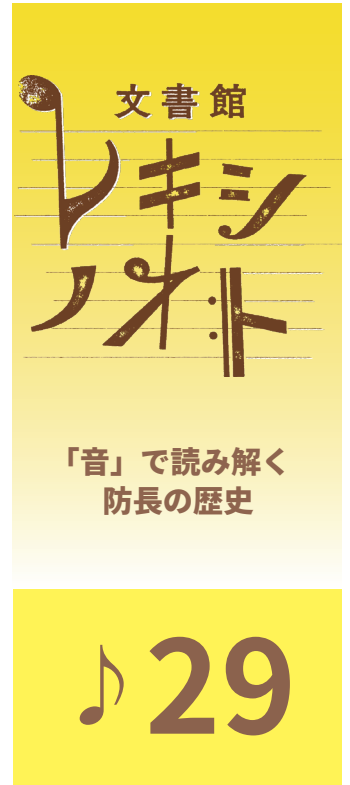




「祭文の段」（小田家文書（柳井市金屋）和漢186）



芸能ノオト④

浄瑠璃と語り ～娯楽と教養の音～

【浄瑠璃】

現在、山口県内には山口市徳地と光市島田に人形浄瑠璃芝居が、周南市安田に糸あやつり人形芝居が伝存しています。人形浄瑠璃は浄瑠璃と三味線の音に合わせて演じられる人形劇です。

「浄瑠璃」は、はじめ琵琶、のちに三味線の伴奏で語られる物語全般を指すことばでした。それが17世紀末頃、竹本義太夫らによって義太夫節といわれる形式がつくられ、人形劇と共に上演して人気を博し、全国に広まります。以後、「浄瑠璃」というと義太夫節を指すことが多くなりました。

18世紀、人形浄瑠璃は庶民に人気の娯楽となります。大坂の竹本座、豊竹座での興行だけでなく、旅興行によっても各地に広まりました。さらに各地で地元の人びとによって上演されるようになり、義太夫節も趣味のひとつとして浸透しました。

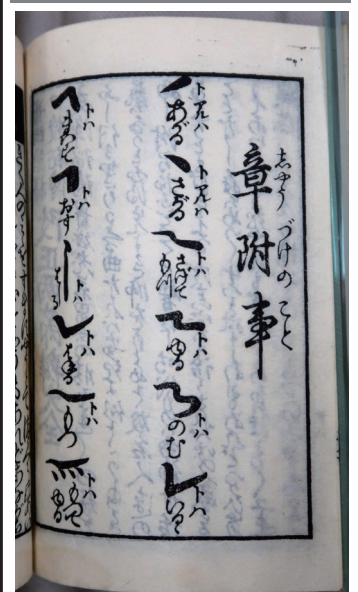
上写真はそのような義太夫節の本で、柳井市金屋の商家小田家に伝わったものです。

【語りと節付】

上の本は1頁（半丁）5行で書かれ、本文の横にはふりがなの他に点が振られています。物語を読むためというよりは義太夫節として語るための本で、朱筆の書き込みは持ち主によるものと考えられます。

書き込みは主に語る際の調子（節）を表すものです。右の写真、「浄瑠璃早合点」内「音曲語様口授秘伝改正両節大全」は各記号について簡潔な解説を加えています。右側上から、「あがる」「さがる」「さげてもつ」「ゆる」「のむ」「いるる」、左側上から、「まはす」「おす」「はしる」「はねる」「もつ」「もつてゆる」とあり、表現の多様さがわかります。上写真には、「もつ」「ゆる」「のむ」などの記号が書き込まれています。

同じく「浄瑠璃早合点」内「浄瑠璃秘曲抄」では、いろは50文字の発音についても行・段に整理して発音法を解説し、抑揚の付け方なども具体的に説明されており、声で表現することに意を用いていた様子がうかがえます。



「浄瑠璃早合点」
（木津屋家文書 245）

天保11年（1840）に刊行された浄瑠璃の独習書を、明治34年（1901）に再刊したものです。表題書と「浄瑠璃秘曲抄」「音曲語様口授秘伝改正両節大全」の合本です。このような独習書は江戸時代にも人気を博したようで、明治時代に入っても再刊、再編集などで様々なものが刊行されていました。

【素人浄瑠璃のひろがり】

小田家文書（柳井市金屋）の中には、50点余の浄瑠璃本があります。板元や書き込みなどから、およそ文政年間（1818-31）前後から明治10年代にかけて収集されたものと考えられます。

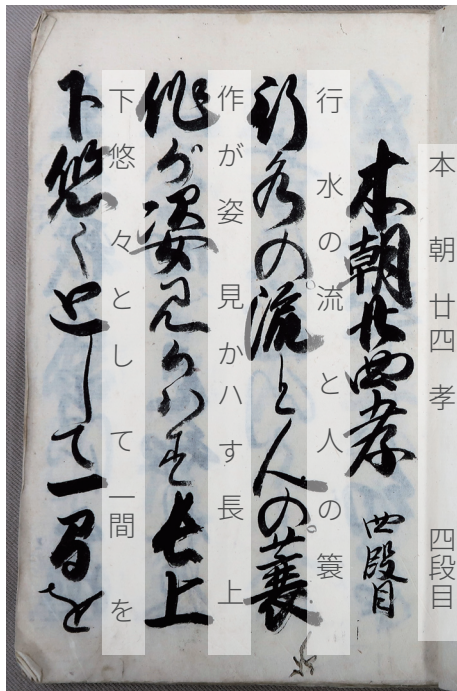
大坂の竹本座、豊竹座は明和年間（1764-72）に退転となりますが、その後も旅興行はおこなわれ、素人による浄瑠璃語も広まってきました。天保10年（1839）初刊の「浄瑠璃早合点」に、「卅年ばかり以前まで八町々に素人浄瑠璃語る者は…至極珍敷、人の用ひも格別なりしに、今は素人浄るり、蟻の涌くがごとくに有て、名も悉く八おぼへられず。…」とあり、素人の浄瑠璃語りが、18世紀初頭から天保年間（1830-48）にかけて大幅に増えていったことがうかがえます。小田家の浄瑠璃本は、このような動きの中で形成されたものと考えられるでしょう。

当館蔵の浄瑠璃本を通覧しても、古いところで寛政7年（1795）の「浄瑠璃床本目録」（小野家文書1220）で、多くは幕末期から明治時代のもです。「小唄三味線浄瑠璃者家業余カヲ以立思（ママ）■者也」と、小唄や浄瑠璃などのために家業を疎かにしない旨を記した「しやうりけいこれんしん帳」（山根家文書193）も安政2年（1855）のもです。このころに始められた人形浄瑠璃も多かったものと考えられます。



〔浄瑠璃本集〕
（小田家文書（柳井市金屋）和漢185～212）

近世後期から明治10年代くらいまでのものが、板本・写本取り混ぜてあります。手前の面にある「むろや」と同筆と考えられる書き込みが明治10年代の本にあり、同時期にまとめられたと考えられます。「廿七巻入」とありますが、帙作成後のある段階で謄本1冊が混入したらしく、現在は28冊が入っています。



「本朝廿四孝 四段目（手習本）」
（清川家文書40）

一般的な崩しで、1字1字が見やすく書かれています。「祭文の段」のような記号もありません。

【くらしのなかの浄瑠璃】

近代を通じて、人形浄瑠璃と浄瑠璃（義太夫節）、これに類する常磐津節などの語り物は身近な娯楽であり、教養でした。当館蔵の手習い本の中には、これらの詞章（物語本文）を用いたものも見られます。それだけ、耳になじんだものだったのでしょう。

金子みすゞの詩「お祖母様と浄瑠璃」には、語られる話が『中将姫』などであったためか、「かなしい話」「かなしい調子」と描かれます。祭りの折などの興行として楽しむだけでなく、「縫ひものしながら」孫に聞かせるようなものでもあったのでしょう。大人になったみすゞは「うたの言葉はわすれました」としていますが、記憶にのこっているのが『中将姫』であったためか、雪の音とあわせて思い出していたようです。（引用：『金子みすゞ全集』新装版、JULA出版局）